

【実践報告】

看護学生が認識する在宅ケア実習施設のケアの現状と課題 ～パーソンフッドの観察記録の分析から～

The current state and problem of the care in the home health care practicum facilities a nursing student recognizes

— An analysis on their reports of personfood —

佐和田重信, 永田美和子, 八木澤良子, 吉岡 萌, 安仁屋優子

要旨

本学在宅ケア実習では在宅療養者への理解を深め、在宅ケア施設におけるより良いケアについて考察する目的で、学生は「パーソンフッドの維持観察記録」と「個人の価値を低める行為観察記録」を行っている。今回、パーソンフッドの観察記録を分析し、学生が認識する在宅ケア実習施設のケアの現状と課題について実習施設へのフィードバックと意見交換会を実施した。

パーソンフッドの観察記録に記述された524件のうち、「個人の価値を高める行為」の記述は344件で、「能力を発揮できるようにすること」「尊重すること」「思いやり（優しさ、温かさ）」「受け入れること」の項目で多くなっていた。一方、「個人の価値を低める行為」の記述は111件で、「無視すること」「子ども扱いすること」「後回しにすること」などが多く、実習施設スタッフの課題として、「尊敬や尊重する態度の必要性」「高齢者との過度ななれあい」、「理解しようとする態度の必要性」、「スタッフの感情コントロールの必要性」、「声掛けや説明の必要性」、「残存機能を維持するケアの必要性」、「業務の工夫や改善」、「TPOに応じた表現方法の必要性」、「利用者間への介入の必要性」が抽出され、パーソンフッドを高めるための継続的な学習と組織的な環境づくりの重要性が示唆された。

意見交換会の参加者からは、「パーソンフッドを高めるケア」の取り組みについて前向きな声が聞かれ、今後も実習施設のケアの質向上につながる在宅ケア実習として取り組む必要がある。

キーワード：在宅ケア実習施設、ケアの質、パーソンフッド

I はじめに

高齢者人口の増大により高齢者の医療・福祉に対する社会の需要は高まり、看護の役割は拡大している。そのため、看護基礎教育の分野においては医療施設以外の場における実習の重要性が高まっている。

本学の位置する沖縄県北部は山間へき地や離島を含む広大な地域であり、過疎化の進行と高い独居率や医療・介護・福祉サービスの慢性的な不足や偏在など、多くの課題を抱えている。このような環境のなか、本学における在宅ケア実習（1単位）は訪問看護ステーション、通所介護、認知症グループホーム、居宅介護支援センターなど多岐にわたる施設で行われており、実習施設には看護職の配置規定がない介護サービス施設もあり、看護職

以外のスタッフが学生の実習指導を担当している施設もある。これまで在宅ケア実習を終えた学生のレポートを分析した結果では、在宅療養者を支える多くの施設やその役割、特殊性、看護職の役割や他職種との連携、地域との関係の重要性等を学んでいることが明らかになっている。また、地域の施設や医療機関を利用しながら多くの高齢者や障がい者が在宅で療養している現実を実感し、在宅ケア実習を通して地域における医療・保健・介護・福祉の現状や課題を考える機会になっている¹⁾。一方、在宅ケア実習施設のケアスタッフを対象としたアンケート調査の結果では、実習指導者と比較して介護スタッフは実習に対する興味・関心が低く、学生との関わりが少ないことが課題として示されている²⁾。

ところで、厚生労働省の高齢者介護研究会による「2015

年の高齢者介護」報告書³⁾によると、これからの高齢社会においては高齢者の尊厳を支えるケアの実現を基本理念としており、2006年の介護保険法改正では高齢者介護の目的に「高齢者の尊厳の保持」と明確化された。しかし、介護サービス施設の現状として慢性的な人材不足や日常ケアに関する倫理的な問題⁴⁾、介護施設における高齢者虐待件数の増加など、高齢者の尊厳を支えるケアの実現は今後も大きな課題である。

高齢者の尊厳を支えるケアの実現には、その人らしさを尊重するパーソンセンタードな対応が重要であり、本学在宅ケア実習では在宅療養者への理解を深め、在宅ケア施設におけるケアを観察する目的で、学生は「パーソンフッドの維持観察記録」と「個人の価値を低める行為観察記録」から構成されるパーソンフッドの観察の記録を行っている。

本研究では、学生の記録したパーソンフッドの観察記録を分析し、明らかになった実習施設のケアの現状と課題を在宅ケア実習施設へフィードバックした取り組みについて報告する。

II 研究方法

1. パーソンフッドの観察記録の分析

平成26年度に在宅ケア実習を終了した看護学科4年生89名のうち、同意の得られた74名のパーソンフッドの観察記録をデータとして分析した。

分析はパーソンフッドの観察記録の「パーソンフッド

の維持観察記録」と「個人の価値を低める行為観察記録」の各17項目に意味内容の類似性に基づき、「個人の価値を高める行為」と「個人の価値を低める行為」に分類し、検討を行った。また、記述内容から学生がケアの課題と考える記述を抽出し、カテゴリー化を行った。

なお、データは複数の教員で分類・検討を行った。

2. 実習施設との情報交換会の開催

本学の高齢者・在宅看護学領域が中心となり、実習施設のスタッフと定期的に開催されている情報交換会において、本研究結果のフィードバックと意見交換会を実施した。

3. 研究期間

平成27年8月～平成27年11月

4. パーソンフッドの観察記録（図1）

パーソンフッドとは「一人の人間として、周囲に受け入れられ、尊重される事」とされ⁵⁾、英国のトム・キットウッドの提唱する認知症ケアの理念であるパーソン・センタード・ケアの中心概念とされている。パーソンフッドの観察記録は、パーソン・センタード・ケアを実践するためのケアの質の改善を目的とした行動観察手法とそのフィードバックを含めた評価システム⁶⁾である認知症ケアマッピング法（DCM）に用いられており、認知症高齢者へのスタッフの対応を観察する項目として、「個

パーソンフッドの維持観察記録 No.4			個人の価値を低める行為観察記録 No.5		
実習場所 () ()			実習場所 () ()		
No. () ()			No. () ()		
学生氏名			学生氏名		
パーソンフッドを維持するための行為	誰が	いつ どこで どのように	個人の価値を低める行為	誰が	いつ どこで どのように
利用者の反応とあなたの考え			利用者の反応とあなたの考え		
意識) / 感じ) / 心へ	思いやり		意識) / 感じ) / 心へ	怖がらせること	
	手を握る			後回しにすること	
	ゆっくりとしたペース			急がせること	
感情) / 気持ち) / 心	尊重する		感情) / 気持ち) / 心	子ども扱いをすること	
	受け入れる			区別をすること	
	祝福する			軽蔑すること	
認知) / 理解) / 知識	相手を認める		認知) / 理解) / 知識	非難すること	
	うそ偽りが無い			だましたりあざむくこと	
	肯定する			わからうとしらないこと	
身体) / 行動) / 姿勢) / 動作	権限を授ける		身体) / 行動) / 姿勢) / 動作	能力を使わせないこと	
	援助する			強制すること	
	可能にする			中断させること	
	協力する			人扱いしないこと	
社会) / 関係) / 役割) / 責任	仲間として認める		社会) / 関係) / 役割) / 責任	差別をすること	
	仲間に入れる			無視すること	
	仲間に関与する			のけ者にすること	
	楽しむ			侮辱すること	

図1. パーソンフッドの観察記録

人の良い状態を向上させる行為」17項目と「個人の価値を低める行為」17項目から構成されている。本学における在宅ケア実習記録のパーソنفッドの観察記録はこれらを参考にして作成されている。

5. 倫理的配慮

平成26年度の在宅ケア実習を履修した4年生に対して、研究の目的、方法、研究への協力・参加は自由意思であり、同意しなくても成績評価への影響はないこと、同意の撤回も可能であることなど、パーソنفッドの維持観察記録をデータとして使用する研究について口頭および文書で協力依頼を行い、同意書を得たうえで実施した。

なお、本研究は名桜大学全学研究倫理委員会による承認および実習施設管理者の了承後に実施した。

III 結果および考察

1. 個人の価値を高める行為について（表1）

パーソنفッドの観察記録に記述された524件のうち、「個人の価値を高める行為」の記述内容は365件であり、そのうちスタッフのケアに関する内容は344件であった。

「個人の価値を高める行為」では、「能力を発揮できるようにすること」の項目が61件でもっとも多く、次いで「尊重すること」の項目が56件、「思いやり（優しさ、温かさ）」の項目が33件、「受け入れること」の項目が31件で記述が多くなっていった。具体的な記述内容としては、「できる力を最大限に活用できるように床や洗濯機の修理、ゴミ出しなどの手助けをし、環境を整えることでできる限り自分で行えるように働きかけていた」、「入浴の時間に拒否があった時、その人のペースを尊重して喫煙

に行きたいなら行ってもらって、時間を置いてから声掛けをしていた」、「昼寝の際にスタッフが畳で添い寝をしていた」、「落ち着きなく過ごされていた時に、スタッフが声掛けをして手を握りながら話を聞いて応えていた。側にいることの大切さを改めて感じた」などであった。

「能力を発揮できるようにすること」がもっとも多かった理由として、介護保険法の目的の1つに介護予防・リハビリテーションの充実があげられており、介護サービス施設では高齢者のADLの維持や残存能力の維持・向上に向けた日常的ケアとして実施されていることから、学生が実習で観察する機会の多いケア内容であることが考えられた。

また、「尊重すること」「思いやり（優しさ、温かさ）」「受け入れること」「共感をもってわかれようとする」とは、特に認知症高齢者に対応したスタッフのケア場面で多くの記述がみられた。認知症高齢者ケアの基本的な考えとして、トム・キットウツの提唱するパーソン・センタード・ケアによる「その人を中心としたケア、その人らしさを引き出すケア」が重要視されている。認知症高齢者を対象とする実習施設においては、パーソン・センタード・ケアの考えが浸透しており、パーソナルケアを高めるケアとしてスタッフの対応を観察する機会が多いことから、記述が多くなったと考えられた。（表1）

2. 個人の価値を低める行為について（表2）（表3）

「個人の価値を低める行為」の記述内容は130件であり、そのうちスタッフに関する内容は111件であった。「個人の価値を低める行為」では、「無視すること」の項目が17件でもっとも多く、「子ども扱いすること」の項目が15件、「後回しにすること」の項目が12件であり、次い

表1 個人の価値を高める行為の記述数

能力を発揮できるようにすること	尊重すること	思いやり（優しさ、温かさ）	受け入れること	共感をもってわかれようとする	一緒に楽しむこと	リラックスできるペース	必要とされる支援をすること	包み込むこと
61	56	33	31	21	19	18	18	16
ともに行動すること	ともにあること	関わりを継続できるようにすること	尊敬すること	喜び合うこと	誠実であること	個性を認めること	一員として感じられるようにすること	
14	13	10	8	8	7	6	5	

表2 個人の価値を低める行為の記述数

無視すること	子ども扱いすること	後回しにすること	強制すること	物扱いすること	能力を使わせないこと	中断させること	怖がらせること	非難すること
17	15	12	9	9	8	6	5	5
騙したり、欺くこと	わからぬこと	急がせること	侮辱すること	あざけること	好ましくない区分け(レッテル付け)	のけ者にすること	差別すること	
5	5	4	4	4	2	1	0	

で「強制すること」と「物扱いすること」の項目がそれぞれ9件と多くなっていた。

典型的と思われる学生の記述内容を表3に示す。なお、差別することの項目に関する記述は見られなかった。

今回の分析から、「個人の価値を低める行為」は「無視すること」「子ども扱いすること」「後回しにすること」「強制すること」「物扱いすること」「能力を使わせないこと」「中断させること」の7項目で約68%を占め、実習施設における高齢者の価値を低める主な要因と考えられた。

パーソンフッドの提唱者であるトム・キットウッドはパーソンフッドを低めるケアを悪性の社会心理としながらも、「介護者の仕事のほとんどは優しさと良心から行われ、悪意があることを意味しない」⁷⁾としており、高齢者の価値を低める行為の多くはケアスタッフの無意識な言葉や対応が要因として考えられた。また、認知症高齢者ケアには専門的な知識や対応が求められ、Kazuiらは介護職員の経験年数に関係なく、介護スタッフが専門的な知識を持っていることが利用者のQOL（生活の質）に影響することを示している⁸⁾。介護サービスの質は専門的な知識や技術を含むものであり、パーソンフッドを高める継続的な学習とそれに基づくスタッフ個人の意識的な高齢者への対応やスタッフ間の日常的な声かけなど、パーソンフッドを意識的に高める組織的なケアの環境づくりが重要と考えられた。

3. 学生が考えるケアの課題

「個人の価値を低める行為」の記述内容から、学生がケアの課題と考える記述を抽出し、カテゴリー化した。その結果、「尊敬や尊重する態度の必要性」「高齢者との過度ななれあい」「理解しようとする態度の必要性」「スタッフの感情コントロールの必要性」「声掛けや説明の必要性」「残存機能を維持するケアの必要性」「業務の工夫や改善」「TPOに応じた表現方法の必要性」「利用者間への介入の必要性」の9カテゴリーに分類できた。

要介護高齢者が増加する中、介護人材の定着率の悪化や慢性的な介護人材の不足から介護スタッフの負担は大きく、業務優先のケアになりがちになることが言われている。また、近年の傾向としてADLの改善・身体的ケアに価値が移行し、精神的・社会的なケアの面ではやや停滞している事も指摘されている⁹⁾。これらは業務遂行に必要な案内的、指示的な言葉が多くなることが想定され、高齢者の尊厳を支えるケアが困難になることが考えられる。大庭は¹⁰⁾介護スタッフのケアの質向上と離職の抑制の課題解決には専門性を高めることが重要であることを指摘しており、介護スタッフの専門性を高めるための組織的な体制や高齢者本人の希望や生きがいに主眼を置いた日常的ケアの実践が重要と考えられた。

4. 実習施設との情報交換会の実施

今回、実習施設管理者から施設ケアの向上のために学生の意見をフィードバックしてほしいとの要望を受け、定期的に開催されている本学の高齢者・在宅看護学領域スタッフと実習施設スタッフとの情報交換会において、本研究結果のフィードバックを実施した。実施内容はアイスブレイキングとしての笑ヨガ体操、研究結果の報告、意見交換会である。情報交換会の様子を写真で示す。なお、写真は参加者の了承を得て掲載した。参加者は医師や看護師、施設管理者、介護支援専門員など多職種におよび、教員合わせて16名の参加であった。

意見交換会では研究結果の報告を受け、課題について意見の交換を実施し、施設でのケアの在り方を振り返る機会となっていた。また、業務中心型に動ける職員が「できる職員」としてみなされる価値観や管理者とスタッフとの認識の違い、文化や環境の違いなど、スタッフ個々の対応によるケア介入が個人の価値を低める行為につながっていることが考えられ、スタッフ間での高齢者個々の情報交換の場を積極的に設けることの重要性が確認できた。その結果、介護人材が慢性的に不足している状況の中、高齢者の尊厳が守られにくい現状にあり、スタッフ個々の専門性や介護観を高める必要性が考えられた。

一方、参加者の多くが介護人材の慢性的な不足を挙げ、



写真1



写真2

表3 記述内容および学生の考えたこと

項目	記述内容（考えたこと）
無視すること	利用者が頻回に呼んでいたが、職員はそれが当たり前かのように、呼びかけに対して無反応（無視）だった。（利用者は何度も呼んでいた。利用者の呼びかけに対しては、都合に合わせてといった感じで、相手を尊重していないと感じた）
子ども扱いすること	利用者がうまくできたことに対して「よくできたね」と頭を撫で、やや子ども扱いをしている部分が見られた。（嫌な様子は見られなかったが、嬉しそうな表情でもなく、頭を撫でられると同時に避けようとする動作が見られた。褒めることは重要だが、その人を尊重した関わりが大切だと感じる）
後回しにすること	職員が利用者に呼ばれた時に、少し待ってと言いつたせていた。（呼んでも来てくれないと怒っていた。忙しくても、利用者のそばに行き利用者が納得できる対応をするか、他の職員に代わりに行ってもらうように伝えるべきであると考えた）
物扱いすること	排泄介助後にその人が居る前で「おしっこしたと言っているけどしていないはず」と他の職員へ話していた（発言の否定と排泄のことは気を使って欲しいだろうな）
強制すること	中々風呂に入ろうとしない入所者が手元でやっていることを遠ざけて連れて行っていた。（見ていたほかの人も「あんな無理やり連れて行かれてね、何するのかね」と不安そうにしていた）
能力を使わせないこと	トイレ排泄するには2名の介護が必要で、時間もかかる利用者がいた。トイレ排泄ではなく、おむつに排泄させていた（トイレで排泄できるのにおむつにしていることは自尊心の低下につながると考えた。また、大切に扱ってもらえていないと感じると考えた）
わかろうとしないこと	「運転免許を返還したのは正しかったのか」「今から学校に通えばまた運転できるようになるか」という問いに対し、介護者は「今は介護が必要だから」「運転は危険だから」等と答えている。（対象者の思いややる気を「認知症だから」「高齢者だから」と区別し、否定しているのではないか。このような関わりはその人らしさの否定につながっていると考えた）
中断させること	看護師の携帯が鳴りケアが中断した（軟膏塗布中で手袋も外し、何よりしょうがないとは思いますが、ケアの最中で3回ほどの中断は良いのか？）
怖がらせること	利用者に声を掛ける時に、後ろからいきなり声を掛けていた（声を掛ける時は、突然声を掛けたりせず、前や横から同じ目線で話しかける必要があると思う。利用者の立場に立って、タッチングの仕方等も工夫して優しく声掛けを行う必要があると考えた）
非難すること	スタッフに何回も同じことを聞いていた利用者に対して、「今さっきもいったでしょ。今日何回も同じこといってますけど」と言っていた。（スタッフとの距離が近く、なんでも言い合える仲とも言えるが、やはりその言葉はどこかで利用者さんの心を不快にさせているのではないかと思った。いくら慣れ親しんだ利用者でも対象者がどのような人なのかを考えて、関わるのが大切であると考えた）
騙したり、欺くこと	車に乗りたいという思いを伝えるが、スタッフの方は「これが終わってからね」と話すが車への移乗はしない。（利用者さんにとっては、だまされていると感じていると考えられるため、乗せない理由をきちんと説明していくことが必要であると考えた）
急がせること	利用者の部屋でデイケアの準備が間に合わないと、恥ずかしがる利用者の着替えを急がせた。（服を離してほしいとの訴えに従ってはいたがやはり羞恥心を感じているようで離すのに少し時間がかかった。タオルケットを利用するなど利用者が快適に援助を受けられるようにする必要があったと考えた）
あざげること	職員が遊び半分で利用者のお尻を叩いていた。職員だけでなく、利用者が杖を用いて職員のお尻を突いたりしていた。（お尻を叩かれてびっくりしている様子だった。遊び半分でも年上の方にお尻を叩くことが私には驚きだった。目上の方を尊重することが大切だと考えた）
侮辱すること	手を伸ばす利用者さんに対して、スタッフは「自分は触りたくない」と首を振って拒否を示す。（叩くそぶりを見せ、威嚇する。本人は、触れ合いを求めているが、つねったり噛みついたりすることもあるため、スタッフの方も警戒してしまっている）
のけ者にすること	介護職員が朝の会などの歌を歌う際に施設内で、発語困難である方の前でどうせ歌えないから歌詞を見せなくてもいいよという発言がみられた。（利用者は耳が遠く聞こえていない様子であった。しかし、発語困難で歌えないかもしれないが他の利用者と同じように歌詞を配り、一緒に何かをするように促すことが自尊心や自らの存在を無視されていないという安心感につながると思う）
好ましくない区分け（レッテル付け）	利用者がホールで談笑しているときに、利用者に対して「この人は弱者だから…」と話していた。（直接言われた利用者は「そうだね」と笑っていた。私は「弱者」という言葉を良い意味で捉えていないため、この言葉を人にかけること自体がどうなのかと考えた。また、他の利用者がこの言葉で傷ついていたかもしれないと思うと、表現の仕方には注意が必要だと考えた）
差別すること	

小規模な施設においてはスタッフの研修会派遣が困難な施設が多いとの意見も聞かれた。本情報交換会への参加が施設管理者のみでなく、多くのスタッフが気軽に参加できるよう工夫することや研修会・勉強会を開催し、学習の場を提供する必要性が示唆された。

IV まとめ

今回、学生の記録から在宅ケア実習施設のケアの現状と課題について分析し、実習施設への報告を実施した。参加者からは、今回の結果をスタッフにフィードバックし、「パーソンフードを高めるケア」に取り組みながら実践できるようにしていきたいとの前向きな声が聞かれた。在宅ケア実習においては実習環境を整備することは重要な課題であり、看護学生が実習を行うことは学生だけの学びではなく、施設スタッフのケアの質向上のためにも有意義と考えられた。

今後も実習施設との協働を考慮し、実習施設のケアの質向上につながる在宅ケア実習として取り組みたいと考える。

引用文献

- 1) 稲垣絹代：沖縄県北部地域の特性を活かした在宅ケア実習の取り組み—小規模多機能施設での実習を開始して—、看護展望, pp28-33, 2014.
- 2) 佐和田重信, 稲垣絹代, 永田美和子, 八木澤良子：在宅ケア実習施設におけるケアスタッフの看護実習に関する認識, 名桜大学紀要 第21号, pp81-86, 2015.
- 3) 厚生労働省：2015年の高齢者介護～高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて～<http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/kentou/15kourei/3.html>
- 4) 箕岡真子, 稲葉一人：介護保険制度下における高齢者介護に関する倫理的問題と今後の課題, 生命倫理, 16巻1号, pp122-129, 2006.
- 5) 水野 裕：実践パーソン・センタード・ケア—認知症をもつ人たちの支援のために—, ワールドプランニング, pp143, 2008.
- 6) 鈴木みずえ(編)：認知症ケアマッピングを用いたパーソン・センタード・ケア実践報告集, クオリテイケア, pp1, 2009.
- 7) トム・キットウッド, 高橋誠一(訳)：認知症のパーソンセンタードケア—新しいケアの文化へ—, pp84-85, 筒井書房, 2006.
- 8) Kazui H, Harada K, Eguchi Y, Tokunaga H: Association between quality of life of demented patients and professional knowledge of care

workers. Journal of geriatric psychiatry and neurology, 21, pp72-78. 2008.

- 9) 前田展弘：要介護高齢者のQOLとケアの質に関する一考察—QOLケアモデルの介入調査をもとに—：ニッセイ基礎健所報, VOL50, pp91-126, 2008.
- 10) 大庭輝：認知症ケアにおける内発的動機づけ研究の提案—介護職員を対象とした研究の現状と課題—, 生老病死の行動科学, pp79-89, 2014.